



Title	自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究：中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として【論文内容及び審査の要旨】
Author(s)	王, 金偉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第12014号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60095
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Jinwei_Wang_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：王 金 偉

審査委員	主査	教授	山 村 高 淑
	副査	教授	西 山 徳 明
	副査	教授	西 川 克 之
	副査	特任准教授	花 岡 拓 郎

学位論文題名

自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究

—中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として—

本論文は、自然災害地に着目し、遺構や遺物、物語や記憶など、自然災害に関するモノ・コトをめぐり、ステイクホルダーがどのように関わりながら、「遺産」としての価値（対象を保存し後世に引き継ぐべき価値）を構築していくのか、事例を通して検証したものである。具体的には、2008年に中国四川省で発生した地震の被災地である「北川地震遺跡区」を取り上げ、文献資料のみならず、インタビューやアンケートといった現地での精緻な社会調査を通し、自然災害に関するモノ・コトの含意が、災害発生直後の「悲劇」「悲しみ」から、複数のステイクホルダーの関わりと観光地化を通して、「追悼」「復興」へと転回していくプロセスを丁寧に記述することに成功している。そしてそこでの知見を踏まえ、自然災害に関するモノ・コトをめぐり、保護し後世に継承すべき遺産としての価値が構築されていくプロセスは、現在のステイクホルダー間の相互作用、ステイクホルダーと対象となるモノ・コトとの関わりを通して構築される動的なプロセスであり、こうしたプロセスにおいては他者に遺産を公開し、その価値を伝えるという行為としての観光が推進力として強く作用していると結論付けている。

こうした本論文の理論的枠組みやアプローチは、いわゆるヘリテージ・ツーリズム（遺産観光）研究の系譜に位置付けられるものであり、その成果も同分野に還元し得るものである。とりわけ、近年のヘリテージ・ツーリズム研究分野において国際的な議論になっているのが、遺産価値の構築プロセスを、観光に関わる主体を含めた複数のステイクホルダー間の力学に着目しつつ、構造的に明らかにしていくことの必要性である。本論文はまさにこうした構造の一端を、具体的事例に関する信

頼度の高い定量的・定性的データを提示することで明らかにした稀有な論文であり、まずその資料的価値の高さが評価できる。さらに本論文では、こうした定量的・定性的データを客観的論拠として、自然災害地を遺産として価値づけることや、ヘリテージ・ツーリズムの目的地として位置付けることの妥当性、そしてそうした目的地における観光マネジメントの課題等について、詳細な考察を行っている。こうした点は、自然災害が多い日本にも実践的な知見や示唆を与えるものとして評価できる。

また、これらデータや知見を踏まえ、本論文では、「負の遺産」という用語の再定義を行っている点も、先駆性、独自性の高い点である。この用語は、目下、人類にとって「ネガティブな記憶や事件を象徴する遺産」を漠然と指し、統一された定義の無いまま学界でも社会でも用い続けられている。しかし本論文では、この用語が指し示す対象が、否定的含意と肯定的含意双方を同時に併せ持つ両義的な存在であり、いわゆる「負の遺産」を観光資源として活用する際には、その双方の含意をステイクホルダーが十分に理解したうえで、インタープリテーションを行うことが重要であることを実証している。とりわけ、中国社会においては、ステイクホルダーの中でも地方政府が大きな影響力を持ち、教育的、政治的な観点から遺産の価値づけやインタープリテーションを行う傾向にある点を指摘し、場合によってはそうした動きが地域住民による価値づけやインタープリテーションとの乖離を生んでいる点を重要な課題として挙げている。こうした議論は、ヘリテージ・ツーリズム研究としても先進的であり、今後の関連研究に新たな視座を提示する、重要な功績といえる。

次に、審査委員会において審査委員から提示された指摘について重要なものを二点報告する。一点目として、特定の自然災害地の事例を精緻に調査した点は高く評価されるが、自然災害に焦点を絞った分析・記述を行っており、また、本論文の限界性に関する理論的記述も不足気味なため、得られた知見を人為的な遺産にまで拡大して一般化し得るかどうかを十分に説明し得ていないのではないかと、という指摘があった。二点目として、複数のステイクホルダー間の相互作用に着目し、代表的なステイクホルダーの言説を取り上げ分析している点は評価できるものの、旅行者に関するデータが相対的に多く、よりバランスの取れた分析を行うためには、適切な理論的サンプリングに基づき、地域住民や地方政府、有識者等の意向に関するデータを補強すべきであるとの指摘があった。

このように、広範な事例との比較研究や、調査対象のより理論的なサンプリング、研究の限界性に関するより論理的な記述、などの必要性は指摘できるものの、本論文が、自然災害地の「遺産」化プロセス、ならびに遺産をめぐるインタープリテーション内容の構築プロセスを詳細なデータによって実証し、ヘリテージ・ツーリズム研究に新たな視座を先駆的に提示し得た点は高く評価される。

よって著者は、北海道大学博士（観光学）の学位を授与される資格があるものと認める。